はじめてのデジカメ教室

第2回 たくさん撮りたい! 長く撮りたい!!

デジカメの欠点の一つに、電池の消耗が多いことがある。肝心なときに電池切れではどうしようもない。また、旅先では簡単に予備のメモリーカードをを入手できないのも悩みのタネだ。長く、数多く撮影するために、少しの知識と心がけでこれらのトラブルを回避しよう。 **（茂木 龍太）**

●肝心なときに撮影ができない…

メモリーカードの残り容量がなくなったり、電池がなくなると使い物にならないデジカメ

デジタルカメラでは銀塩カメラのフィルム代わりに、メモリーカードを使うのはご存じの通り。フィルムでは「24枚撮り」と撮影可能枚数が明示されている。一方、デジカメで使うメモリーカードは「64MB」と容量は示されているが撮影できる写真の枚数は示されない。これは、デジカメの撮影データが、解像度と圧縮率の2つの条件で変化して、一意に決まらないためだ。

解像度は1枚の画像を構成するための画素数（ドット数）で表す。解像度が高いほど高画質になるが、用途によって選択する必要がある。一般にA4判に印刷するには200万画素程度あれば十分と言われている。一方、ディスプレイ上で見る分には80万画素相当の1024×768ドットで、多くのパソコン上で画面いっぱいに映し出せる。メールに添付して送るには640×480ドットか、それ以下にすることが多い。

解像度と圧縮率

撮影データの大きさ（データ容量）は、画像データの解像度（ドット数）と圧縮率で決まる

■2048×1536ドット（低圧縮）

■2048×1536ドット（高圧縮）

■640×480ドット（低圧縮）

■640×480ドット（高圧縮）

●解像度と圧縮率で決まる撮影枚数

解像度（ドット）	高画質（低圧縮）	低画質（高圧縮）
2048×1536ドット（300万画素相当）	27枚	81枚
1600×1200ドット（200万画素相当）	45枚	128枚
1280×960ドット（130万画素相当）	69枚	199枚
1024×768ドット（80万画素相当）	107枚	306枚
640×480ドット（35万画素相当）	265枚	664枚

オリンパス光学工業の「C-3040ZOOM」で64MBのメモリーカードを使用時

高解像度なら高圧縮でも実用に

また、画像データは圧縮しないと640×480ドットのデータでも1MB弱と非常に大きなものになってしまう。そのため通常1/5～1/20程度に圧縮する。圧縮率が高いほどファイル容量は小さくなるが、画質は落ちる。左の例で分かるように解像度が高いときは圧縮率の違いは分かりにくいが、低い解像

撮影：村田 和聡　モデル：諸星 結　撮影協力：恵比寿ガーデンプレイス

度では違いが顕著になる。設定のときには留意したい。

撮影データを消せるのが魅力

デジカメではフィルムに相当するメモリーカードを手軽に買い足せない代わりに、簡単に撮影データの消去ができる。撮影データを表示させる「再生モード」にして、消したいデータを表示させ「ゴミ箱」ボタンを押せばそのデータは消え、その分だけ撮影できる枚数が増やせる。

逆に、大切なデータは、「プロテクト」（または「ロック」）をすることで、誤操作による消去を防げる。消去するデータが多いときは、残しておきたい写真をプロテクトしておき、「全消去」操作を行えば、プロテクトしていないデータを1回の操作で消去できる。なお全消去は、あとで説明する「フォーマット」とは別の操作である。

撮影途中で、撮影可能枚数を増やすもう一つの方法は、初めに説明した解像度や圧縮率を変えることだ。もちろん画質は落ちてしまうが、撮影できないよりはマシだろう。また、一部の機種では撮影済みデータの解像度を落として（「リサイズ」と呼ぶ）、撮影可能枚数を増やすことができる。自分のカメラにこの機能が備わっているかあらかじめ確認しておけば、万が一のときに慌てずに済むだろう。

多くの種類がある電池

多くの読者はメモリーカードの残り容量がなくなることもさることながら、電池がなくなって撮影ができなくなることも経験しているのではないだろうか。

現在、発売されている機種では、単3形電池が使える製品が多い。電池は、大きく分けて使い捨ての乾電池と、再利用が可能な充電池の2種類がある。乾電池はマンガン、アルカリ、リチウムなどの種類がある。値

メモリーカードの中身を整理

カードの残量が少なくなったら、まずは不要なデータを捨てよう。一度捨てると元には戻せないので、操作は慎重に

逆に、誤操作で消すことのないように大切なデータには「プロテクト」をかけておこう。こちらは、後で解除が可能だ

緊急時の撮影枚数の増やし方

●撮影の途中で残り枚数を増やす

左下の数字が撮影可能枚数。撮影している最中にカードの残り枚数が減ったら解像度を変更する

とりあえず、撮影できるデータを1枚から28枚に増やすことができた

解像度とともに圧縮率の変更も有効な手段だ

●撮影済みデータを小さくする

ソニーや富士写真フイルムなどの一部の機種では、すでに撮影した画像データの解像度を小さく（リサイズ）することができる。写真はソニーの「DSC-P30」

電池を選んで快適な撮影を

単3形電池にはいくつかの種類がある。左上からマンガン電池、アルカリ電池、リチウム電池、ニッカド充電池。右は充電器に入っているニッケル水素充電池

同じ種類の充電池でも製品によって電源容量（mAh）が異なる。また、電圧が1.2Vと乾電池（1.5V）に比べて低い

ケースに入れておくと、使用済みと未使用の電池を混同することがない。パソコンショップなどで数百円で売っている

液晶ディスプレイはこまめに消す

液晶ディスプレイの消費電力は意外に大きい。撮影データの再生も含めて使用は、必要最小限にしたい

使う前にはカードのフォーマット

当たり前の話のようだが、イベントが終わるごとに撮影データはパソコンに保存して、メモリーカードはフォーマットしておこう

段はそれぞれ単3形1本当たり50円、100円、400円程度である。充電池にはニッカドとニッケル水素がある。価格は同じく200円、500円程度。充電池には、ほかに3000円程度の充電器が必要になる。

充電池は同じ種類でも電源容量が異なる。現時点ではニッカドで1000mAh、ニッケル水素で1600mAhがもっとも大容量のものだ。購入するときに気をつけたい。充電池の電圧は1.2Vと乾電池（1.5V）に比べて低い。最近1年ぐらいの機種では問題ないが、古い機種では充電池が使えるかを取扱説明書で確認しておこう。製品によっては、独自形状の専用充電池しか使えない。その場合は予備を買い足して、持ち歩くしか手はない。

電池の消費量が多い機能としては液晶ディスプレイの表示がある。機種にもよるが、液晶を消しておくだけで、1.2～2倍弱の撮影が可能になる。長く撮影を行いたいなら光学ファインダーを使って、液晶ディスプレイはなるべく使わないように心がけたい。これは再生のときにも言える話だ。撮影データをすぐ見られるのは、デジカメの特徴の一つだが、あまり楽しみ過ぎると、いざというときに撮影できなくなってしまう。

また細かいことだがデジカメを持ち出す前には、撮影済みをデータをパソコンに保存してメモリーカードを「フォーマット」（または「メモリーカードの初期化」）しておきたい。出先で、撮影済みデータを見ながら消去しては、時間も電池も無駄になる。

付属メモリーカードは予備として

カメラ本体に付属するメモリーカードは、4MBから多くて16MBと少々心もとない。別売の大容量のカードを買っておきたい。現在、コストパフォーマンスに優れているのは容量64MBのもので、実売1万円前後だ。付属のカードは予備として携帯し、いざというときに使うようにしたい。

また、TypeIIのコンパクトフラッシュ対応の製品なら、ハードディスクを内蔵する日本IBM製の「マイクロドライブ」が使える。マイクロドライブの価格は340MBで実売価格2万円前後、1GBで4万円前後と記録容量あたりの価格は、圧倒的に安い。ただし、消費電力が大きいので注意が必要だ。

予備の電池を持ち歩くのはもちろんだが、デジカメを使うときは常に電池の残り容量に注意を払うようにしたい。また、電池の端子をふいておくだけで、最大10%ほど撮影枚数を増やすことができる。これは、電池の端子が手の油などで汚れていると、電池の残り容量があっても電圧が低下してカメラに必要な電圧が確保できずに撮影ができなくなるからだ。

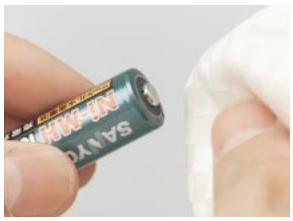
デジカメのフィルム

コンパクトフラッシュならマイクロドライブと呼ばれるハードディスクが使える。ただし、厚いTypeII対応の機種に限られる

大容量のメモリーカード（上列）を使えば、多くの枚数の写真が撮れる

チョットの工夫で撮影枚数を増やせる

電池の残り容量には常に注意を払っておこう

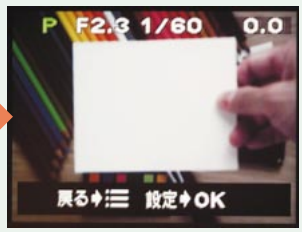


電池の端子をふいておくだけで、動作時間を延ばすことができる

デジカメ機能をフル活用（ホワイトバランス編）

●ホワイトバランス設定は色再現のかなめ

左は晴天用のホワイトバランス設定を使い電球下で撮影した例。茶色がかって色が正しく表現できていない



メニュー画面から「ホワイトバランス」→「ワンタッチ」を選択する

白い紙を置いて、設定を行う。紙が用意できない場合は白い服や、壁などをファインダーに入れて設定する

白い被写体が見つからないときは、「プリセット」を使う手もある

銀塩カメラ、デジカメを問わず写真の色が、肉眼で見たときと異なることがある。デジカメの大きな特徴の一つに、このようなことを防ぐための色温度の調整が簡単にできることが挙げられる。写真はその場所の光、例えば晴天下、蛍光灯により色が変化する。銀塩ではフイルムの種類を変えたり、引き伸ばし時に調整するが、デジカメは撮影時の設定で対応できる。この調整を白いものを白く写すという意味で、「ホワイトバランス」をとるという。

デジカメは自動的にホワイトバランスを調整するが、より正確に行いたいときは白い紙や服、壁などを使い、手動で設定する。この機能は「ワンタッチ」「スポイト」などと呼ばれている。また「プリセット」と言う、状況に応じた、いくつかの設定が登録されているものもある。